

# 仏書から見る日本の古典籍

落合博志

これまで、国文学研究資料館の調査や、他のグループによる調査を通して、寺院所蔵の資料に接する機会が何度かあった。<sup>(1)</sup> 寺院所蔵資料の主体を成すのは、言うまでもなく仏書である。仏書は、本来の所蔵元を離れて一般の図書館・文庫等に蔵されるものも少なくないが、それらの多くが個別・断片的な状態で置かれているのに対し、寺院所蔵の仏書は、量においてまとまっており、またしばしば有機的な体系を成している点で、それらとは決定的な違いがある。これは寺院資料の悉皆的調査を通して経験しているものであつて、図書館等で仏書を閲覧しているだけでは容易に感得できないことであろう。<sup>(2)</sup>

もとより現存する仏書は厩大であり、稿者がこれまでに見たものは大海の一滴にも及ばないであろう。しかしながら、その僅かな経験によつても、従来の日本の古典籍研究は仏書に関して考察が十分でなく、そのために多くの問題を含んでいるように思われる。

文字通り「葎の髓から天を窺う」ような話であるが、今回は仏書という観点から、日本の古典籍の調査・研究と記述のあり方について述べてみたい。

## 一、仏書の装訂と日本の古典籍

寺院における仏書の調査を通して印象に残ったことの一つは、装訂の多様さと、それが古い時代から後代まで伝えられているという持続性・継承性であつた。

日本の古典籍の装訂の歴史を顧みると、現存の資料から窺う限り、奈良時代まではほぼ卷子本に限られていたかと思われる。しかし平安時代には、卷子本のほかに折本、また粘葉装・列帖装・袋綴・双葉装<sup>(3)</sup>といった各種の冊子本が現れてくること、現存する資料から知られる。そして列帖装・双葉装からは、やがて料紙に折紙<sup>(4)</sup>を使った折紙列帖装・折紙双葉装が派生する。その年代を推測する材料を持っていないが、室町時代には存在しており、恐らく鎌倉・南北朝時代に遡るかと思像している。

冊子本の各種の装訂と仏書の関わりを述べると、粘葉装については、伝藤原行成筆粘葉本『和漢朗詠集』・伝公任筆本『古今和歌集』・西本願寺本『三十六人集』のように十一世紀以降歌書等に用いられた例も見られるもの、仏書にはそれ以前からの例があり、恐らく仏書が先行すると考えて

よいであろう。かつ、歌書等では鎌倉時代以降粘葉装の装訂は稀になるが、<sup>(5)</sup> 仏書においては室町時代まで多くの宗派で普通に用いられ、特に真言宗では明治以降まで椀形の行法次第書の写本に用いられたこと、高野版の冊子本が伝統的に粘葉装の装訂を採り江戸時代に及んだことは特筆される。

袋綴は、十一世紀後半頃から遺品が残るが、平安時代の実例は主に天台宗の仏書のほか、鈴鹿本『今昔物語集』・『打聞集』など寺院で製作されたと考えられる本に限られており、これも恐らく仏書が先行しよう。袋綴は鎌倉時代以降様々なジャンルに採用されて普及したが、<sup>(6)</sup> 仏書においても後々まで一般的な装訂であった。

列帖装は、年代の明確な最古の遺品が元永三年（一一二〇）書写の元永本『古今和歌集』であり、それ以降江戸時代まで多数の和歌や物語の写本に見られることから、一般には歌書や物語の装訂というイメージが強いかも知れない。しかしもとよりそれらに特有の装訂ではなく、様々な分野の書物で用いられている。仏書においても、粘葉装や袋綴に比べれば少ないものの、江戸時代まで列帖装本が作られており、また歴史的に見ても、現存する最古の列帖装本に属するものが伝存している。

勸修寺に、仁海の『敦造紙』の写本上下二冊が蔵される。上冊は延享二年（一七四五）に補写されたもので列帖装。下冊は古写本で、綴じ糸は改められているものの、明らかに列帖装である（図版一）。<sup>(7)</sup> 下冊の原裏表紙の見返しに、勸修寺の寛信（一〇八四〜一一五三）の自筆と考えられる次の朱筆識語が記されている（図版II）。

此<sup>(8)</sup>□子伝授次第 有両帖

小野僧正仁海 自抄之

醍醐僧正覚源 自写之

大谷阿闍梨覚俊

先師大僧都殿—

寛信 五代相承

勸修寺住僧寛信記

仁海（九五四?〜一〇四六）は、真言宗小野・広沢両流のうち小野流の祖とされる名匠。覚源（一〇〇〇〜一〇六五）は花山天皇の皇子で、仁海の弟子。覚俊は生歿年未詳であるが、覚源の弟子で、俗系では甥に当たるとされる。

次の「先師大僧都殿—」は、寛信の師の殿覚（一〇五六〜一一二二）を指す。即ち、仁海が草したものゝを覚源が写し、覚源↓覚俊↓殿覚↓寛信と伝えられて来た由緒正しい写本であることが知られる。

奥書がないため覚源の写した年代は判明しないが、覚源は師の仁海から示されて書写したのであるから、仁海の歿した永承元年（一〇四六）を下限とすることができ、特に治安二年（一一〇二）に仁海から伝法灌頂を受けていることから、その前後の可能性が高いと言えようか。いずれにしても、十一世紀前半の書写であることはほぼ確実である。

なお、年代の明確な最古の列帖装本は先述の通り元永本『古今和歌集』であるが、年代の不明確なものならば、歌書にもそれを遡ると推定されているものがいくつか存在する。中でも梅澤本『斎宮女御集』は十一世紀初めの写本とも言われ、<sup>(8)</sup> 推定通りならば、勸修寺本『敦造紙』と並ぶか少し遡る頃の写本となる。しかし少なくとも、現存する遺品から窺う限り、

歌書とほぼ同時期から列帖装の仏書が現れ、江戸時代まで継続して作られていたことは確かである。

双葉装は、従来の書誌学ではほとんど取り上げられていないように思われるが、紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目に近い端を糸や紙縫などで綴じた装訂を指す。粘葉装と同じ紙の使い方であるが、糊付けでなく糸などで綴じる点が異なっている。管見では版本の例はなく、写本にのみ見られる。

この装訂について言及している稀な例が、和田維四郎氏『訪書余録』（大正七年）の次の記述である。

冊子に在りては猶左の区分あり。

イ、一面にのみ印刷し之を二つ折とし、糸にて綴りたるもの 普通の冊子

此種のものに於ては其折口に標題又は丁数を記せるもの多し、之を版心又は俗に柱といふ

ロ、厚紙を用ひて両面摺とし綴糸の外に尚糊を用ひ粘合せるもの

粘葉綴粘葉綴とは大和綴といふ

ハ、粘葉綴と同様なれど、糊を用ひず、単に糸のみにて綴りたるもの  
の 胡蝶綴胡蝶綴又は大和綴といふ

往時の仏書中高野版には粘葉綴多く、歌集等には大和綴を用ふるものと多し

イは袋綴、ロは粘葉装であり、ハはここで言う双葉装に当たると考えてよいであろう。

右の記述は、冊子本の一般的な装訂の一つである列帖装に言及せず、粘葉装の俗称を「列丁綴」とすること、糊だけで紙を貼り繋いでいく粘葉装を「綴糸の外に尚糊を用ひ粘合せるもの」と説明すること、歌集には和田氏が言われるほど双葉装が多くはないことなど問題も少なくないが、ともかくも稿者の言う双葉装を取り上げていることは確かである。

ところで、山本信吉氏『古典籍が語る―書物の文化史―』（平成十六年）の中に、次のような記述が見える。

私は大和綴という装幀は、綴じ穴が上部に二つ下部に二つの計四穴で、上部二穴、下部二穴を糸で織った平織、あるいは組紐で綴じた装幀法を指すものであること、しかしこの装幀法は当初からのものではなく、粘葉装本が糊り離れをした場合に応急手当てとして行われた日本的な綴じ方と考えていた。

ところが、冷泉家時雨亭文庫の歌書を拝見して、いろいろと驚き、教示を受けたなかの一つに、古写本の装幀として大和綴装が多いということであつた。もちろん、一言で大和綴といつてもいろいろとあつて、もとは明らかに粘葉装本であつたが、伝来の途中で貼り合わせ目の糊がきかなくなり、このため、本の右端を紙擦で仮綴じ風にとめた本（たとえば『後拾遺和歌集』など）もあれば、現在は後世の手で立派な大和綴装となつているが、もとは粘葉装であつた『権中納言敦忠集』『能宣集』『重之女集』（以上、冷泉家叢書第一四巻、『平安私家集一』所収）などがある、しかし、そのなかでたとえば『素性集』（唐紙本）『花山僧正集』（ともに『平安私家集一』所収）などは、料紙の

綴じ目に糊跡がなく、またかつて綴葉装であったことを示す紐の穴跡もなく、成立当初から大和綴装であったことが認められる本である。

したがって、製本にさいして始めから綴じ穴を上二つ、下二つとあけて、それぞれを糸糸で綴じた装幀法が、平安時代後期に日本的装幀法として成立していたことは確かであると思われる。

右に言う「大和綴」は、『訪書余録』の「大和綴」を承けているのかどうか分からないが、紙の使い方が稿者の言う双葉装に当たるとは推定できる。ただし山本氏の場合、冊子本の右端の上下各二箇所ずつに穴を開けてそれぞれ糸や紐を通して結ぶ、いわゆる結び綴（これを大和綴と呼ぶ人もある）の綴じ方を採ることをも含めて「大和綴」と呼ばれているようである。<sup>10)</sup>

山本氏の挙げられた『素性集（唐紙本）』や『花山僧正集』は十一世紀後半の書写と推定されており、これにより双葉装の装訂が平安時代の歌書に用いられていたことが実証できる。

一方、右の例以降、南北朝時代までは双葉装の実例を存知していないが、室町時代以降になると、天台宗や浄土真宗の写本に少なからず双葉装の例が見られる。<sup>11)</sup>しかし従来この装訂がほとんど取り上げられてこなかったのは、仏書の書誌的調査が不十分であったことが基本的要因ではあるが、右の山本氏の文章に窺えるように、たまたま実例に接しても、粘葉装の糊離れしたものを糸や紙継で綴じたものとして見過ごされてきたためではないかと思われる。

いずれにしても、仏書には必ずしも珍しい装訂ではないにもかかわらず、双葉装が一般にほとんど認識されていないことは確かで、その端的な例が、

屋代本『平家物語』の装訂に関する佐々木孝浩氏の「屋代本平家物語」の書誌学的再検討」（『平家物語の多角的研究』平成二十三年）の記述に見られる。

本書で一番気になる書誌的な特徴はその装訂である。春田氏解題は「大和綴じ」とするが、この呼称は結び綴じか綴葉装を指すので適当とは言えないようである。本書は一見すると四つ目綴の袋綴であるように見えるのだが、料紙は袋になっておらず、袋綴とは異なり綴目側で折られたものが重ねられている。つまり折目近くを糊付けして重ねて行く「粘葉装」の仕立てになっているのである。粘葉装の糊代部分が虫損で痛んだり、糊が弱くなった為に、綴じがバラバラとなることを避けるために、表紙の上から袋綴のように糸綴じすることはままあることであるが、本書には糊を付けた痕跡は確認できないのである。しかも綴代部分の上端を指で挟んで、厚みを確認しながら手を下にならずしていくと、表紙の下は三個所の紙釘装となることが判る。巻十一は後述の様に表紙が失われているために三個所の紙釘の頭が確認でき、触診の判断が誤っていないことを証明している。

以上のような状態を整理して説明すると、本書は粘葉装用に用意した料紙を用いながらも糊付けはせずに、紙釘による下綴じを行い、表紙を加えてから袋綴の様に糸綴じをした装訂、といういささかややこしいものにならざるを得ないのである。

かなり持つて回った説明をされているが、そのように複雑に考える必要はなく、双葉装の装訂と考えれば済むことであろう。<sup>12)</sup><sup>13)</sup>なお屋代本『平

家物語』は縦三二×横二一cmほどの大ぶりの本であり、粘葉装本としてはやや異例であることも付け加える。

仏書に例の少なくない装訂として、もう一つ、折紙双葉装に言及しておきたい。これは双葉装の一種で、料紙に折紙を用いたものである(図版Ⅲ)。

本来の折紙を更に折り目と直角に折つたものを重ねて綴じた、横長の本が主であるが、時に全紙を縦向きに置いた折紙から作つた縦長の本も見られる。稿者の経験では、天台宗の聖教にこの装訂を採るものが少なくなく、横本で袋綴でなければ、ほぼ折紙双葉装と言つてよい。

この装訂は、これまでの書誌学で言及したのを見ず、双葉装以上に一般に認識されていないようである。それを示す例として、和田恭幸氏「近世刊本小考」(『江戸文学と出版メディア』平成十三年)を引く。

和田氏はこの論考の中で、横本と実用性の関係を論じ、横本型の慶長寛永中刊本のうち仏書の例として『枕双紙』(元和七年宗存版古活字本)・『法華経品釈』(元和七年宗存版古活字本)・『六帖要文』(寛永九年叡山版古活字本)・『七帖要文』(寛永元年叡山版古活字本)を挙げた上で、次のように述べられている。

しかし、仏書の項はその数四例ながら、格段と示唆に富む。実を云うと、仏書の項に登載の、寛永元年(一一六二四)古活字刊本『七帖要文』は、長帳綴の横本なのである。近世文学をご専攻の方には、浮世草子の八文字屋本と同じ様式、と云えばご理解頂けようか。要は、書籍の下辺が、料紙の折山になっているのである。

本来、長帳綴は刊本の装訂ではない。写本の領域に立ち入るなら

ば、双葉列帖、若しくは長帳綴の仏書が少なからず存在する。そこで、同書の写本を求めるならば、奇跡的にも寛永元年刊本の直接の底本、天文十九年(一五九二)真祐直筆本(叡山文庫真如蔵)が存在した。果たして、これが、長帳綴の横本であった。

和田氏の言う「長帳綴」は、折紙を重ねて右端を綴じた装訂で、本来は文書・記録類の用語であり、稿者は古典籍一般の装訂名称としては「折紙綴」と呼ぶべきかと考えているが、ここではしばらく和田氏の呼称による。さて、和田氏は寛永元年刊古活字本『七帖要文』と、その底本となつた叡山文庫真如蔵の天文十九年真祐写『七帖要文』を長帳綴とされているが、古活字本『七帖要文』は実は折紙双葉装であつて、長帳綴ではない。恐らく和田氏は、叡山文庫天海蔵の同書を見てそう言われたものかと推測するが、天海蔵本は新しい表紙に改装されており、妙法院蔵の原裝本によれば、古活字本『七帖要文』は明らかに折紙双葉装である(図版Ⅳ)。妙法院本が縦一四・九×横二一・六cmであるのに対し、天海蔵本は縦一四・一×横一九・九cmと横が一・七cm短く、改装の際、背の折り目を裁断したために長帳綴の形になつたと見られる。また、真如蔵の真祐写『七帖要文』も折紙双葉装である。

もっとも和田氏はたまたま改装された本を見たために、古活字本『七帖要文』を長帳綴と判断してしまつたのであり、また真祐写『七帖要文』は綴じがきつく、意識して丹念に調べなければ折紙双葉装であることは容易に気付かれないので、和田氏の誤認には一応斟酌の余地がある。しかし折紙双葉装の仏書写本の存在、特に天台宗の聖教ではしばしば見られること

を認識していれば、誤認は防げたのではなからうか。

因みに、仏書以外の折紙双葉装の例として、『蹴鞠要法書』（正徳三年写。平成二十五年明治古典会出品）と、道明寺蔵『名所百首四文字題和哥詠草』（江戸初期写）に気付いた。今後注意すれば、仏書以外に用いた例は更に見出されると思われる。

以上、仏書の冊子本の装訂に焦点を当てながら、従来の古典籍研究において認識が不十分な点について述べてきた。初めに記したように稿者が見た仏書は現存するうちのごく僅かな部分に過ぎず、今後の調査に俟つ所も少なくないが、日本の古典籍の装訂とその歴史を考える上で仏書が重要な意味を持ち、その調査は避けて通れないことはとりあえず指摘できたかと思ふ。

## 二、日本の古典籍研究における仏書の問題

次に節を改め、日本の古典籍とその研究における仏書の位置について考えてみたい。

日本の古典籍の歴史は、他の書物文化の発達した地域と同様写本から始まる。七世紀初めの『法華義疏』が現存する初例であるが、それが『法華經』の注釈書であることが象徴するように、奈良時代までの現存写本は、一部に漢籍も含まれるものほとんどが仏書であり、特に経典とその注釈書が中心である。平安時代の写本には、次第に仏書以外のものも増加するが、量的にはやはり仏書が多くを占めている。もともとこれは現存する写

本についてのことであり、寺院には古い書物が比較的残りやすいという事情を考慮する必要があるが、実際に作られた数においても、仏書の優位性は動くまい。鎌倉時代以降は、写本の中での仏書の割合は相対的に低下したものの、江戸時代まで依然相当量の仏書の写本が作られていたことは事実である。

奈良時代の百万塔陀羅尼を嚆矢とし、平安後期頃からは遺品が連続して伝わる版本についても、五山版の約三割を占める漢籍の外典を除けば、室町時代以前はほぼ全てが仏書と言ってもよい。<sup>17)</sup>江戸時代に入ると出版の隆盛とともに広範なジャンルの版本が現れるが、その中で引き続き仏書が多く刊行されたことは明らかである。

このように、日本の古典籍の中で仏書は歴史的に極めて重要な位置にあり、また量的にもかなりの割合を占めている。仏書を視野に入れなければ、日本の古典籍の全貌は捉えられないことは自明であろう。なお書物としての古典籍の研究においては、内容は必ずしも直接の対象にならないが、思想史・文学史を初め日本の文化の叙述において、仏書を媒体とする仏教系の著作は絶対に外せないことは改めて説くを要しない。

しかし従来、日本の古典籍の歴史を記す際、例えば奈良時代までの写本の歴史や、百万塔陀羅尼以降中世までの出版史のように、仏書に言及しないと記述ができない場合は仏書を挙げて説明し、そうでない場合は仏書をほとんど顧みていないが、これは全くおかしいことである。仏書の系譜を全体として捉えようとせず、都合によってその一部を恣意的に使っているに過ぎないと言わざるを得ない。

また、平安時代以降の仏書のうちでも、古版本はしばしば言及されるが、  
仏書の古版本を取り上げるのであれば、その背後にある仏書の写本にも目  
を向けるべきである。宋版等に基づく五山版や泉涌寺版のように写本を背  
後に持たない版本は別として、一般的には写本の享受を背景として版本が  
刊行されたのであり、<sup>(18)</sup>写本との関係を考えながら版本の作られた理由や意  
味を考え、古典籍史に位置付けていく必要がある。従来は、往々にして版  
本だけを切り離して記述するに止まっているが、それではその版本を十分  
説明したことにならない。

ほかに、前節で見た冊子本の装訂のように、従来の古典籍研究では仏  
書の写本が十分視野に入っていないために、書誌的事象の体系的把握にお  
いてしばしば欠ける所があるように思われる。

このように日本古典籍の研究において仏書の認識が不十分であることに  
は、従来の仏書の調査・研究のあり方にも一つの原因がある。仏教古典籍  
についてのどのような研究が行われてきたかを顧みると、書誌研究としては  
春日版・高野版・浄土教版・五山版など寺院別・宗派別の版本の研究<sup>(19)</sup>に比  
重が置かれ、写経<sup>(20)</sup>を別として写本の体系的な研究が乏しい。その一方で、  
高山寺・石山寺・仁和寺・大覚寺・醍醐寺・青蓮院・三千院・興福寺など  
写本の所蔵に富む有力な古刹の経蔵の目録が相次いで公刊され、研究を裨  
益すること大であるが、それらに書誌的観点からの概説が付くことは少な  
く、個々の資料に関する詳しい書誌記述はあっても、新しい知見を共有す  
ることは容易でない。つまり、仏書の写本の書誌に関するまとまった研究  
成果がないためにそれを踏まえた記述ができないのであり、右に指摘した

ような問題も、全ては日本の古典籍の中で仏書の写本の調査と書誌的考察  
が立ち後れていることに発していると言えよう。<sup>(22)</sup>

ここにおいて、仏書を写本・版本を含めて全体的に調査・研究する必要  
性を訴えたい所であるが、これは実際には相当の難業である。仏書の体系  
的研究には蔵書量の多い寺院の調査が不可欠であるが、そもそも寺院は閱  
覧施設ではないので、特定の一点二点ならばともかく、全体の調査は中々  
受け入れられにくく、幸い許可が下りても悉皆調査には多大な時間がかか  
る。むしろ、往前の研究者もその必要性は十分承知していたけれども、困  
難さのために中々踏み込めなかったのが実情かも知れない。

しかし困難を回避しては、いつまでも先に進むことはできない。仏  
書という、重要でありながらこれまでの古典籍研究がややもすれば避けて  
きた対象に正面から取り組まなければ、我々は日本の古典籍に対して永久  
に不十分な認識に止まらざるを得ないであろう。それを国文学研究資料館  
が行うのが適当なのかどうかは考慮の余地があるが、国文学研究資料館は  
科研による調査のように数年区切りではなく、同じ箇所について継続的に  
調査することができると。機関の性格上、仏書の調査にのみ力を注ぐことは  
難しいとしても、今後可能な範囲でできるだけ従来の欠を埋めるべく努め  
ていきたい。

〔付記〕本稿は、平成二十五年度国文学研究資料館調査員会議における講  
演の内容を基に文章化したものである。全体の主旨は同じであるが、  
個々の記述には当日触れなかったものも含まれている。

注

(1) 主要な箇所を挙げる。

西教寺正教藏(滋賀)・寛永く寛文年間に湖東芦浦観音寺の舜興が収集した天台宗を主とする聖教。西教寺は天台真盛宗。

善通寺(香川)・真言宗。善通寺伝来本のほか、明治の廃仏毀釈に伴って周辺の真言宗寺院から移された聖教も多い。

願教寺(岩手)・島地黙雷・大等父子収集本が主。願教寺は浄土真宗であるが、天台宗ほかの古写本も含む。

瑞光寺(京都)・日蓮宗。元政以下歴代住持の筆写本・収集本等。  
最明寺(神奈川)・真言宗。重文指定の『往生要集』を初め、古写本も少なくない。

勸修寺(京都)・真言宗。平安く室町時代の古写聖教に富む。  
妙法院(京都)・天台宗。江戸時代のものが比較的多いが、室町写本も少なくない。

(2) もっともまとまった量を目の当たりにし、それらが関連しつつ存在していることを感ずるのは、寺院に限らず、一般に古くからの資料を累積的に伝えていく所蔵者において経験することではあるが。

(3) 双葉装は、折紙双葉装とともに稿者の仮称する装訂である。詳しくは後述参照。

(4) 古文書の用語としては、全紙を横向きに置き、折り目が下になるようにして二つに折ったものを指すが、古典籍においては、その半載や、全紙を縦向きに置いて二つ折りにしたものも含める方が適切である。

(5) 中でも三宝院流・中院流関係のものが多し。

(6) ただし袋綴の古例は紙縫で結び綴などにしたものが多く、後代に一般化する四つ目・五つ目の糸綴本は同じ袋綴でも系統が異なるのではないかと推測し

ているが、詳しくは別の機会に譲る。

(7) 下冊の書誌について補足すると、後補裏表紙の見返しに延享元年の補修識語があり、補修の際三方小口が截断されているらしいが、現状での大きさは縦一五・五×横一五・四cm。料紙は楮紙。全五折で、各折とも料紙五く六枚を重ねる。原表紙・原裏表紙を含め全六三丁。

(8) 日本名跡叢刊『梅澤本斎宮女御集』解説(昭和五十七年)。ただしその中で梅澤本と同筆とされる徳川美術館本『斎宮女御集』は、徳川黎明会叢書『私家集・歌合』の解題(昭和六十年)で鎌倉初期写とされており、書写年代は検討を要するか。なお、ほかに関戸本『古今和歌集』などが十一世紀後半書写の列帖装本と推定されている。

(9) なお列帖装は版本には稀な装訂であるが、その中に謄本(光悦本の一部と元和卯月本)とともに、真言宗の声明関係の本や浄土真宗の和讃本が見られることはも付け加えておく。もともと、これらは列帖装と仏書の関係を示すと見るよりは、謄本と併せて歌謡・音楽関係の版本と列帖装の繋がりと捉えた方がよいかも知れない。

(10) 因みに『素性集(唐紙本)』『花山僧正集』について、冷泉家時雨亭叢書の解題や『冷泉家の秘籍』は「大和綴」と説明するが、これは紙の使い方を言ったのではなく、紐を用いて結び綴にしていることを指すらしい。

(11) なお、寺院と関わらない双葉装の例として、管見では江戸末期写の歌書(国文学研究資料館蔵『歌合抜書』)を見出しているが、確認例が少ないため、寺院以外で双葉装が細々とも伝えられてきたのかどうかは目下の所明言し得ない。国文学研究資料館蔵『長恨歌』(室町末期写)・『西行上人発心記』(江戸前期写)もあるが、両者とも寺院製作の可能性が考えられる。

(12) 佐々木氏の引く「春田氏解題」は、貴重古典籍叢刊『屋代本平家物語』(昭和四十八年)所載の春田宣氏の解題を指すが、春田氏が屋代本の装訂を「大



和綴じ」とされたのは、あるいは『訪書余録』の説によったものか。とすれば、用語の点で紛らわしくはあるものの、むしろ妥当な指摘とすべきである。

- (13) なお、佐々木氏は『軍記と語り物』第四十九号（平成二十五年三月）の「書物としての平家物語」において、「V屋代本は綴葉装ではないが、極めて特異な装訂としてここで言及しておきたい。粘葉装の仕立てをしながら料紙を糊付けせずに、紙釘で下綴じし、袋綴の様に糸綴じしたものである。落合博志氏より青蓮院の蔵書に同様の装訂があるとのご教示をいただいた。」と記されているが、稿者は妙法院にある双葉装（折紙双葉装を含む）の本について話したつもりである。

- (14) このことは、古活字本『七帖要文』の刊記によって知られる（第七冊末）。  
右七帖要文者柏原成菩提  
院第十代住持真海法印  
類聚也然而世間流布本  
広略在之併末学添削敷  
今所写者真海法印嫡弟  
真祐法印以直筆之本校  
之令刊摺者也

于時寛永元年中夏十日

- (15) 古活字本『七帖要文』は稀覯で、『天天台書籍綜合目録』は日光天海蔵本と叡山文庫天海蔵本を挙げるのみ（『国書総目録』も同じ）。

- (16) なお、寛永元年刊古活字本『七帖要文』は、寛永九年刊古活字本『六帖要文』とともに、版本に折紙双葉装が用いられた稀な例である。底本となった写本の装訂を継承したのであろう。因みに、古活字本『六帖要文』の叡山文庫真如蔵本は原装本であるが、叡山文庫天海蔵本は『七帖要文』と同じ表紙の改装本で、やはり背が切られて折紙双葉装の原形を失っている。

- (17) 五山版を別とした仏書以外の古版本は、正平版『論語』などごく少数である。  
(18) 例えば年代的に古版本には属さないが、前掲の古活字本『七帖要文』の刊記には、「世間流布本」が「末学添削」によって広略の相違を生じているため、撰者真海の嫡弟真祐の写本を以て校訂し刊行したことが記されている。もつともこの刊記は、底本とそれを採用した理由を明示している点で、かなり稀有な例ではある。

- (19) 春日版に関しては大屋徳城氏『寧楽刊経史』（大正十二年）、高野版に関しては水原堯栄氏『高野版の研究』（大正十年）、浄土教版に関しては藤室祐範氏『浄土教版の研究』（昭和五年）、五山版に関しては川瀬一馬氏『五山版の研究』（昭和四十五年）が代表的かつ基礎的な研究である。

- (20) 写経については、田中塊堂氏『日本古写経綜鑑』（昭和二十八年）・『日本古写経現存目録』（昭和四十八年）が基礎的なリストとしてあり、近年では国際仏教大学院大学のプロジェクトによる調査・研究が顕著な成果を挙げている。

- (21) 宮崎円遵氏『真宗書誌学の研究』（昭和二十四年）は、親鸞の著作を中心としたものであるが、古写本・古版本にわたり広く調査した研究として特記される。

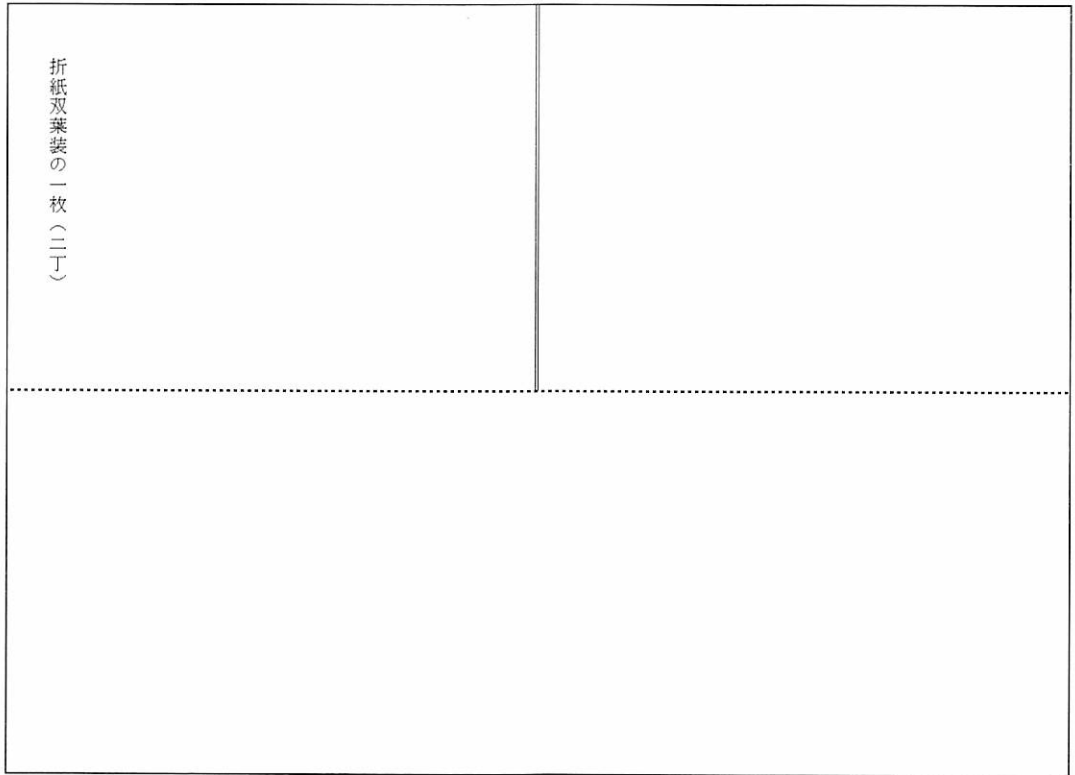
- (22) 日本の古典籍研究における仏書の位置付けの問題点を示す代表的な例が、『日本古典籍書誌学辞典』（平成十一年）である。同書では、仏教関係の典籍としては写経と古版本を取り上げるのみで、古写本・古筆切のカテゴリーには仏書がほとんど全く見られないが、目録では仏書の聖教目録も取り上げており、書肆では仏書専門の本屋も挙げ、蔵書家では寺院や仏書中心の収集家も立項するなど、方針が全く一貫しておらず、仏書の扱いの不徹底性・不統一性が露呈している。

**Rights were not granted to include this image in electronic media.  
Please refer to the printed journal.**

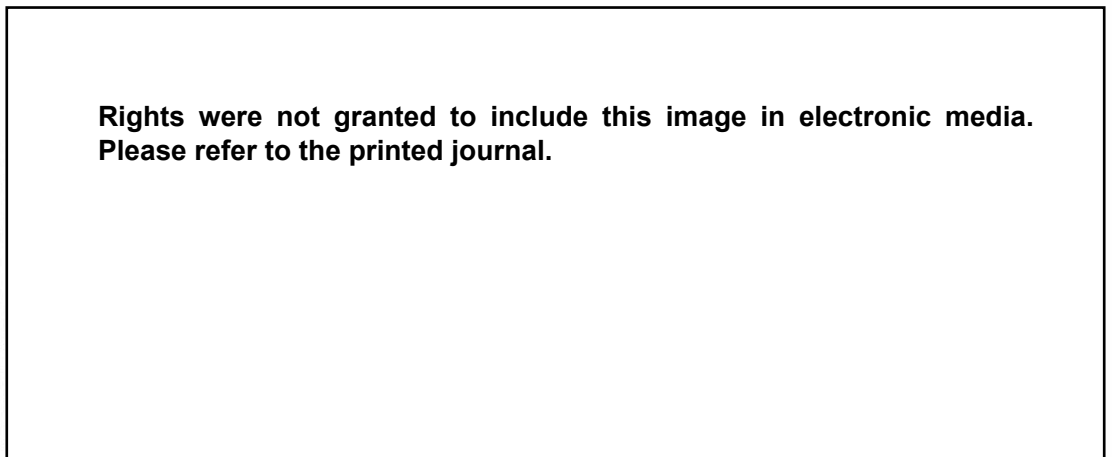
図版Ⅰ 勸修寺蔵『敦造紙』下冊 下小口と背の一部

**Rights were not granted to include this image in electronic  
media. Please refer to the printed journal.**

図版Ⅱ 勸修寺蔵『敦造紙』下冊 原裏表紙見返し寛信識語



図版Ⅲ 折紙双葉装の一枚（点線で山折りにし、更に二重線で山折りにし、複数枚を重ねて右端を紙縫や糸で綴じる）



図版Ⅳ 妙法院蔵『七帖要文』第一冊四ウ～五オ（第四丁までが目録の丁で、咽に「目二」とあるのは、紙としては二枚目のため）